

『イラストレイテッド 光の科学』

大津元一監修、田所利康、石川謙著／朝倉書店

私たちの周りは、知っているし存在は確かでおおよその性質は小学生の頃から学んでいるけれども、実は良く分からないものに満ちあふれている。「光」もそうしたものの一つではないだろうか。「光」があるからこそ、目で物が見えることは今さら言うまでもないだろうが、中学校の理科で学ぶレンズや屈折現象はあまり良く分からなかったという人も少なくないでしょう。まして「どうして“色”が見えるのだろうか？」という話を始めると、そう簡単には説明できない。「空がなぜ青いの？」と訊かれてつい「それは海が青いからさ」などと気取って答えたとしても「そんな冗談言って。あなた理系でしょう？」と突っ込まれるのがオチ。技学を学ぶ皆さんには、身の回りの自然現象についてある程度は理解しておいて欲しい。とはいえ、光を学ぶ機会といえば「物理」の授業でしょう。物理と聞いただけで「難しいから無理！」と逃げ腰になってしまう人も多いのでは？ その理由の一つは、法則や知識を頭に詰め込むことでいっぱいいっぱいになってしまうからかもしれません。しかし、光が醸し出す世界はとても美しく魅力に溢れています。その美しさを感じて頂くのに好適な本が最近出版されたので、ご紹介したいと思います。

本のタイトルの通り、この本は全ページがイラストや写真です。物理の教科書の多くは白黒の図版と数式で占められていますが、この本は美しく鮮やかなカラー印刷で、光のさまざまな現象を絵で表現しています。数式を用いずに、巧みな絵で説明されていますので、光に関わるさまざまな現象が容易にイメージできること請け合いです。この本の「刊行にあたって」には「いわば絵と写真で謎解きをしていく『光の絵本』です」と紹介されていますが、まさしく「光の図鑑」です。白黒図版では容易に表現できなかった物理現象を、フルカラーの立体的イラストで巧みに表現しています。光学の教科書と併せて読んで頂ければ、これまで難解に感じていた光学現象が、生き活きと頭の中にイメージできると思います。

著者の趣味はカメラというだけあって、「光の干渉」の例を示した昆虫の写真一つとっても芸術的な美しさです。このような美的センスの高い著者は、カラーイラスト（作図）においてもそのセンスを存分に発揮しています。Adobe社のIllustratorという描画ソフトで描かれていますが、物理現象を図解するお手本とし

でも大変に参考になります。光学以外の分野に携わっている方々にも、「絵を描くためのデザイン参考書」としてもご活用頂けるのではないかと思います。「この現象の説明には、この表現法があったのか！」というような新しい発見があるかもしれません。

